

長編あるいは連作の試み

## 吉本隆明の『記号の森の伝説歌』

長野 隆  
(ながの・たかし)

この詩集が刊行当初(86・12)から読者に与え続けた或る種の戸惑い——それを例えば佐々木幹郎の「言おうとしていることはわかるにしても、言いたいことと、それを表わす手つきとの間に物凄い開きがあつて、そこで手つきそのものが、ほとんど啞のようになってしまつてゐる」(『現代詩手帖』87・12)という苦言や、北川透の「評価としては、これはあまりに古いということになるだろうけど、ともかくこういうものを力づくで成立させてしまふ吉本さんという人は、僕が考えていたよりも、もっと奇怪な(内面をもつた)人だという感じがしました」(同)という感想に代弁させることもできる。或いは、吉田文憲のように「吉本隆明の詩がかつてこれほど深く詩の根源的な場所にまで下降したことはなかった、またかつてこれほど深く氏がその遠いところで眠り込もうとしたことはなかった」(『現代詩手帖・臨時増刊』86・12)と、掛け値なしの賛辞もないわけではない。近頃、この詩集ほど評価の割れたものも珍しく、その意味では、周囲に及ぼした波紋も小さいとはいえない。

問題はどこにあるのか——おそらくこの問いかけは、ひとり「吉本隆明」の輪郭を上回り、現代詩の「現在」へと差し向けられて行く性質のものだろう。私などは、不意に、萩原朔太郎の例の「氷島」問題を思い出して、その思い付きに、だがどことなく手応えのようなものを感じてしまった。ついでだから示しておく、例えば次のような傍線箇所を、どのように始末すれば「記号の森の伝説歌」に振り替えられるか、という問題だ。

著者は、すべての芸術的意図と芸術的野心を廃棄し、単に「心のまま」に、自然の感動に任せて書いたのである。したがつて著者は、決して自ら、この詩集の価値を世に問はうと思つて居ない。

不遜だ、と言われるべきだろうか、或いは誤謬と。だとすれば、入沢康夫の次のような発言に出くわした感触などは、どう処理されればいいのだろう。

吉本氏のこんどの長編詩は、はなはだ面白いのである。これまでに出た書評類はここに含まれてゐる大切な問題の数々に、ろくすつば氣付いてゐないかのやうだ。まあ、これから追ひ追ひと本格的な批評も書かれることだらうが、この本を手掛かりにして日本の「詩」の運命を考へてみることでつて可能なんぢやなからうかと、私なぞには思はれるのである。(『吉本隆明氏の長編詩』、『詩学』87・3)

私にはどうしても萩原の「詩の原理」その他の問題が、吉本氏の『戦後詩史論』や『マス・イメージ論』のそれと重なつて見えてくる。つまり、「氷島」のそれに対応する、「現在」における「記号の森の伝説歌」の「問題」である。

むろん、この視点に拘つてみたいのには別の理由がある。

「記号の森……」成立のもととなる作品が約十年の歳月(一九七五―一九八四)をかけて「野性時代」に掲載された際、それらが「遠い自註」という表題のもとに連作詩されていたことと、詩集編纂時にあつては「一篇一篇の詩に対してその詩に対する

注釈になるような詩を一篇ずつにつけていって、それでまとめ（「現代詩手帖」90・1）る意匠が新たに働き、寧ろそれ（ら）を称して「遠い自註」とする意向があつたようにも聞いたからで、要するに、この「自註」といういかにも異風な意匠を内に秘めた必然のようなものに、ふと『氷島』のそれを想い合わせてみたからだ。実際には（一つの詩に対してもう一つの詩について）緊張関係（同右）をつくり出すように詩は書下ろされなかつたし、表題も「記号の森の伝説歌」と改まって現在のような体裁（長編詩七篇に再構成）になつたのだが、「遠い自註」という秘められたタイトルの暗示だけは、依然として残っている。「自註」とは何なのかを問うことから、この詩集の構造に入つて行くこともできそうに思える。

ずっと太古に

視えない空の michi を

鳥と幻だけがとおれた

幻はすばやく 鳥はおそかつたので

鳥は足なえてあえいだ

ひとつの比喩ができあがるまで

鳥はその位置で停つてなければならぬ

変幻するあいだ

羽搏きも失墜もゆるされない

巢を出なかつた女の幻と

巢を捨てちまつた男の幻よ

舟の形が産みおとされる

恋はこえる

愛もこえる

妄執はただ走るだけ

（舟歌）

伝説歌はこうに書きだされるが、これを（現代詩）という既存の枠組で受け取ろうとするには、あまりに大きな穴があいている。私Ⅱ個の脱落に伴う現在Ⅱ現実の剝離が、自明な大胆さとなつて言葉の世界に実現されているからである。こういう言葉の世界は神託とか祝詞に近いものだが、それとも違ふのは、個を超え意味を超えて共有される無意識の世界に作者が向かおうとはしていないところだ。むしろ言葉は意味をこそ迎へと理の振舞いを見せており、その向こう側に抽象的な個人Ⅱ作者の思索が構えられている。見方を換えれば、行間に伏せられた作者の無言の語りが、書かれた言葉を宙に持ち上げ、それによつて（言葉の事実）に抽象度が増えらるる仕組みなのだ。或いは抽象的な思索が（うた）われるところで、概念的な部分が無言の物語となつて行間に残されたというべきか。

ともかく、こういう詩が、いわゆる現代詩として括り出しにくいのは言うまでもないが、にも関わらず一方で詩として読めるところに、敢えて危険をおかして日本詩の（現在）を問う（吉本隆明）の個的な問題があるように見える。「遠い自註」という幻のタイトルはその場所を暗示しており、同時に詩の表現が発せられる位置をも教えている。その「遠い自註」がさらに「遠い自註」を必要としたという多分にアイロニカルな事情も、詩の出来不出来とは別のところで、（修辭的現在）に向きあつたチ

ヤレンジの所産と見えなくはない。

つまり、先の詩は、このようにも読めるのである——と言つて「へうた」を「物語」る危険はここでは回避しようと思うが、  
 〈吉本隆明〉の読者であれば、幾分明な読解コードに気付かせられる仕組みになっている。というか、読解コードのなお深奥をこの伝説歌を通して覗き込む仕組みになっている。言葉や詩の起源に向かう思索、それにかの「幻想」成立の場への遡行……等々、要するに、〈長篇詩「記号の森の伝説歌」〉は、その背景に、吉本隆明の大きいなる思想、まさに世界思想を、したがって思想を世界たらしめた論と、知とを、負っている。伝説歌の世界は、その論と知と可能にした思想力の、さらに本源——幻想力そのものの具現として、吉本隆明のすべての思想的作品の前面にたちあらわれるべきものだった。／伝説歌の語り手は、なにもものか——それは「吉本隆明」という幻である。作者は、この幻の由来と、その必然（不可避さ）と、巡遊と、その帰着とを、解きあかそうとしているのだ（菅谷規矩雄「『記号の森……』の吉本隆明」、『現代詩手帖』88・3）という、ユニークな、しかしきわどい詩法の架設を認めなくてはならない。

このことは、突き詰めれば、『記号の森の伝説歌』という作品成立の必然、自体が作品の言葉としてうたわれる（語られる）のに等しく、そこに「遠い自註」なるタイトルの由来も、さらにそれがもう一つの「自註」を引き寄せようとした事情も伺い知れる。作者はみずから紡ぎ出す言葉（歌）の必然を、その言葉自体によって語らせようとしているのだ。それは作者自身が別のところで「語ることができる理路のなか／で註をつける」とこれはあくまで／詩ではない（「太陽と死とは」と言うの

ときわどく、交叉する表現の提出の仕方であり、それ故「遠い自註」の「遠い」とは、そのせめぎあいの極限的な構えのようなものを指す。と同時に「現在」なるものに対する作者自身の詩言葉の向き合い方を示している。それがこの詩集の冒険であり、また或る晦渋さとなつて言葉の方へはねかえっている。

通常、詩はみずからの偶然性を獲得すべく意匠されるが、この場合、それとは逆の手付き、つまりその必然性を演出すべく架設されているので、詩というよりは詩論、ないしは論の感触を残すだろう。作者自身の自伝的な記憶をよぎらせる部分は別にして、この詩集の企ては、そういういわば「言葉の世界」の中だけで「独立した輪郭や意味概念を産出」（マス・イメージ論）させようとする「ありえないかもしれないテーマ」（同）をめぐつて書き起こされた可能性すらある。少なくとも作者は、現在に向き合うより以上に長いスパンを与えてこの表現の存続を求めている。詩語の現代性や詩想のモダンティイはとりあえず脇に睨む格好で、あたかも「吉本隆明」という現在」をめぐぐる意味ある記述として後代へ託す遺言のように——

「さつきから黙つたまま／「さよなら」は 影絵みたくに／ひっそりと 主賓の席にひかえている／詩は 書くことがいつばいあるから／書くんじゃない／書くこと 感じること／なんにもないから書くんさ／ぼつりそうつぶやくと／忌わしいわれらの時代の／鋭敏な言葉の「壮丁」として／『民数紀略』の文句にまぎれて／消えていった／シナイの野のモーゼみたくに」

——伝説歌は、こう結んでいる。

（演歌）